

「雨夜の品定め」の射程

吉田 幹 生

—

『源氏物語』帚木巻の前半部を占める雨夜の品定めが、光源氏の中の品や下の品の女性へと誘う効果を有していることは論を俟たない。それは、源氏自身が

A かの中の品にとり出でて言ひし、この並ならむかしと思し出づ。

(帚木①九四)

B かの下が下と人の思ひ捨てし住まひなれど、その中にも、思ひのほかに口惜しからぬを見つけたらばと、めづらしく思ほすなりけり。

(夕顔①一四四)

と回想していることからしても明らかである。しかし、先行する『落窪物語』や『うつほ物語』での落窪の姫君と道頼、俊蔭女と兼雅との関係に照らして、空蟬や夕顔と源氏との邂逅を語ることが導入を要するような話柄であったとは考えにくい。零落した女性と貴公子との恋物語は、当時の読者にとって馴染みのある内容であったと思われるのである。

とするならば、空蟬や夕顔との具体的な恋物語に先行して、何故

このような座談の場が必要とされたのであろうか。それが帚木三帖の導入として機能していることは確かだとしても、それだけが理由とは見なしがたいのである。

この問題に「身分」という視点から挑んだのが、今西祐一郎氏であった。¹⁾今西氏は、右に見たような物語の伝統を認めた上で、『枕草子』「返る年の二月廿余日」に「仲忠が童生ひのあやしき」という発言が見られることや、絵合巻での「この世の契りは竹の中に結びければ、下れる人のことこそは見ゆめれ」(②三八〇)というかぐや姫についての評価から、一条朝の宮廷社会では、宮廷中心の物語観が存在しており、その観点から物語が享受されていたことを指摘した。そして、光源氏が自らの意志と関心から空蟬や夕顔と関係を持った場合に予想されるそのような場での非難を回避し、空蟬たちとの関係はすべて雨夜の品定めのないのだと弁護するために座談の場は必要とされたのだと考えたのである。

教えられることの多い説ではあるが、伊予守の家から女たちが紀伊守邸に移ってきていることを耳にした光源氏が「その人近からむなむうれしかるべき。女遠き旅寝はもの恐ろしき心地すべきを、た

だその几帳の背後に」(帚木①九三)と言っているように、源氏からの働きかけという側面を否定することはできないし、また、揚名介の家を目にして「いづこかさしてと思ほしなせば、玉の台も同じことなり」(夕顔①二三六)との感想を抱いているように、源氏は宮廷中心の価値観に縛られていたわけでもない。それゆえ、今西説をもつてしても、先の疑問を氷解させることは難しいように思う。

そこで本論では、光源氏と空蟬や夕顔の物語を語り出すにあたって、何故雨夜の品定めが設定されたのか、あるいは言い換えて、この雨夜の品定めは後続の物語にどのような影響を及ぼしているのかということについて、改めて考えてみることにしたい。雨夜の品定めを問題にする場合、『源氏物語』全体の女性観や女の生き方という側面から考えていくやり方も存在するが、ここではそのような大局的な視点に立つのではなく、あくまでも物語の展開ということにこだわって、雨夜の品定めを冒頭に有する帚木三帖、あるいはいわゆる帚木系の巻々の位置づけやそれらを含む物語全体の構成を明らかにすることを目指していきたい。

二

空蟬との出会いが光源氏の人生にとって衝撃的だったのは、

C (源氏ガ) 寝られたまはぬまに、「我はかく人に憎まれても習はぬを、今宵なむ初めてうしと世を思ひ知りぬれば、恥づかしくてながらふまじくこそ思ひなりぬれ」などのたまへば、(小君ハ) 涙をさへこぼして臥したり。(空蟬①一一七)

D さて、かの空蟬のあさましくつれなきを、この世の人には違ひて思すに、おいらかならましかば、心苦しき過ちにてもやみぬべきを、いとねたく負けてやみなんを、心にかからぬをりなし。(夕顔①一四四)

などと記されているように、初めて女性の拒否にあつたからである。源氏に襲われた翌朝、源氏に向かつて

E いとかくうき身のほど定まらぬありしながらの身にて、かかる御心ばへを見ましかば、あるまじき我頼みにて、見直したまふ後瀬をも思ひたまへ慰めましを、いとかう仮なるうき寝のほどを思ひはべるに、たぐひなく思うたまへまどはるるなり。(帚木①一〇二)

と発言し、また後日

F 心の中には、いとかく品定まりぬる身のおほえならで、過ぎにし親の御けはひとまれる古里ながら、たまさかにも待ちつけたてまつらば、をかしうもやあらまし、しひて思ひ知らぬ顔に見消つても、いかにほど知らぬやうに思すらむ、と心ながらも胸いたく、さすがに思ひ乱る。とてもかくても、今は言ふかひなき宿世なりければ、無心に心づきなくてやみなむ、と思ひはてたり。(帚木①一一一)

と考えているように、伊予介の後妻として「品定まりぬる身」となったことが、空蟬が源氏を拒む原因であった。とすれば、これはいかに中品の品ならではの拒否の理由であり、なるほど空蟬は源氏がこれまで遭遇したことのない種類の女性であつたに違いない。

では、そのような空蟬との出会いは、光源氏に何をもたらしたのか。たしかに、両者の邂逅には雨夜の品定めが重要な役割を果たしていた。しかし、頭中将が「中の品になむ、人の心々おのがじしを立てたるおもむきも見えて、分かるべきことかたがた多かるべき」(帯木①五八)と述べたのは、「女の、これはしもと難つくまじきはかたくもあるかなと、やうやうなむ見たまへ知る」(帯木①五六)に始まる一連の会話の中であつたように、あくまでも恋愛ないしは結婚対象の女を選ぶという文脈においてであつた。それこそが「すきがましきあだ人」(帯木①五四)と紹介される頭中将の見方なのであり、別の言い方をすれば、

G なり上れども、もとよりさるべき筋ならぬは、世人の思へることも、さは言へど、なほことなり。また、もとはやむごとなき筋なれど、世に経るたづき少なく、時世にうつろひておぼえ衰へぬれば、心は心として事足らず、わろびたることも出でくゝるわざなめれば、とりどりにことわりて中の品にぞおくべき。受領といひて、他の国の事にかかづらひ営みて品定まりたる中にも、また、きざみきざみありて、中の品のけしうはあらぬ選り出でつべきころほひなり。(帯木①五九)

と説明はしていても、彼女たちをそうあらしめている背景にまで踏み込んで理解する様子はあまりうかがえないのである。この点は、「世のすき者」(帯木①五八)とされる左馬頭や藤式部丞にしても同様である。基本的に彼らは、好色心から中の品の女性に関心を抱いているのだと思われる。

それに対して源氏の場合は、前節でも触れたように、自ら女を所望して紀伊守邸に方違えしたり、また、催馬楽「我家」を踏まえた会話などによつていかにも一夜限りの性の相手を物色するといった雰囲気醸し出されたりしているように、好色心が原動力となつていることは疑い得ないものの、それと同時に、空蟬が伊予介の後妻であると聞いて

H「似げなき親をもまうけたりけるかな。上にも聞こしめしおきて、『宮仕に出だし立てむと漏らし奏せし、いかになりにけむ』といつぞやのたまはせし。世こそ定めなきものなれ」と、いと
およすけのたまふ。(帯木①九六)

と発言しているように、世の無常を一方では見据えてもいるのである。先にも夕顔巻での「いづこかさしてと思ほしなせば、玉の台も同じことなり」という感想を引いたが、源氏の心底には、栄光と没落とが紙一重であり両者が容易に変わり得ることへの敏感な感性が底流しているように思われる。この感性が、空蟬(たち)との出会いを通して、新たな展開を切り拓いていくのではないか。もつとも、このように言つたからといって、源氏が憐憫の情から空蟬に迫つたのではないことは後続の物語が示すとおりである。源氏にとって空蟬は、何より方違え先で一夜を共にするための女であり、自分の自由になる受領の後妻というに過ぎないのであつた。

しかし、そう思つていたからこそ、空蟬の拒否は源氏にとって衝撃的だったのである。空蟬は前掲Eのように源氏に告げて拒むのだが、これこそ受領層に転落した女性の悲痛な叫びであり、世の無常

さに翻弄された悲劇的な人生の告白にほかなるまい。空蟬の物語に
おいては、そのような空蟬の内面が繰り返し強調されている。とす
れば、そのような空蟬の悲しみを理解することが、源氏には求めら
れていたということになる。

逢瀬の翌朝は空蟬に対して「世に知らぬ御心のつらさもあはれも
浅からぬ夜の思ひ出は、さまざまめづらかなるべき例かな」(帯木
①一〇三)と述べ、「つれなきを恨みもはてぬしのめにとりあへ
ぬまでおどろかすらむ」(帯木①一〇三)との和歌を詠んでいた源
氏であったが、帰邸後は「かの人の思ふらむ心の中いかならむと心
苦しく思ひやりたまふ」(帯木①一〇五)という配慮が見られるよ
うになる。しかし、だからといって空蟬の内面が理解できたわけ
はなく、その後も言い寄っていくように、やはり再度の逢瀬を源氏
は求めているのである。しかし、二度目の訪問のさいに「帯木の心
をしらでその原の道にあやなくまどひぬるかな」(帯木①一一二)
と詠んでいるように、空蟬の心に関心が向けられている点は見逃せ
ない。この点は、軒端萩との対比によって「このまされる人よりは
心あらむと目とどめつべきさましたり」(空蟬①一一二)とより鮮
明化され、最終的に源氏は

空蟬の身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな

(空蟬①一二九)

との和歌を詠むに至る。この「人がら」は、空蟬が残して逃げた薄
衣の小桂を蟬の抜け殻になぞらえて表現したものが、同時に「人
柄」の意が掛けられてもいる。「なほくかな」という言い回しは、

明けぬれば暮るるものとは知りながらなほうらめしき朝ほらけ
かな
(後拾遺・恋2・六七二・藤原道信)

つらしとも思はぬ人や忘るらん忘れぬわれはなほつらきかな

(赤染衛門集・四六)

のように、理性では制御できない感情の動きを表すことが多い。そ
れゆえ当該歌においても、掛詞という修辞に支えられてではあるが、
源氏は空蟬の人柄への禁じ得ない慕わしさを表現しているのである
う。吉見健夫氏は、これまでの展開も踏まえつつ、当該歌について、
「このように源氏のこの歌では、空蟬物語のはじまりでは軽佻な好
色者の造型をほどこされていた源氏が、中の品の女性の内面性に共
感するにいたるといふ、物語の理想的な主人公としての精神的な成
長が示されているわけである」と捉えたが³⁾、基本的に首肯されるべ
き見方だと思われる。つまり、空蟬と光源氏との関係は、予想外の
拒否にあつた源氏がしかしそれゆえにこそ空蟬に惹かれていくとい
う展開をたどるのであり、源氏を拒むその内面性に関心を注ぎつつ、
最終的にその人柄を好ましいものと把握することで一区切りとなる
のである。

しかしながら、その把握が空蟬の置かれた境遇への理解にまで到
達するものであつたかと言われると、否定的にならざるを得ない。
夕顔巻で空蟬のことを回想する源氏は前掲Dのように描かれるのだ
が、それに続けて

Iかやうの並々までは思ほしかからざりつるを、ありし雨夜の品
定の後、いぶかしく思ほしなる品々あるに、いとど隈なくなり

ぬる御心なめりかし。

(夕顔①一四四)

と評されるように、源氏の抱いた共感とは「中の品になむ、人の心々おのがじしの立てたるおもむきも見えて、分かるべきことかたがた多かるべき」という程度に留まっていたと言うべきであろう。

三

続く夕顔との出会いも、始まりは源氏の好色心からであった。乳母の見舞いに出かけた源氏は、隣家から届けられた和歌に興味を持ち隣人の素性を探るように惟光に命じることが、「例のうるさき御心」(夕顔①一四〇)と呆れられ、宮仕人だとの情報を得て興ざめるものなお見過ごせないでいると、語り手から「例の、この方には重からぬ御心なめるかし」(夕顔①一四一)と評される始末である。そして、前掲Bのように、雨夜の品定め議論にも後押しされて、この恋に身を乗り出していくのだが、やがて源氏は、自分でも制御できないほど夕顔にのめり込んでいくことになる。

J「今日もこの部の前渡りしたまふ。来し方も過ぎたまひけんわたりなれど、ただはかなき一ふしに御心とまりて、いかなる人の住み処ならんとは、往き来に御目とまりたまひけり。

(夕顔①一四二)

K「人のけはひ、いとあさましくやはらかにおほどきて、もの深く重き方はおかれて、ひたぶるに若びたるものから世をまだ知らぬにもあらず、いとやむごとなきにはあるまじ、いづこにいかうしもとまる心ぞとかへすがへす思す。(夕顔①一五三)

その理由は、Jに「いかなる人の住み処ならん」とあるように、夕顔が正体不明の謎の女であったこと、また、Kに明らかでないように、夕顔自身の魅力によるものであった。言うなれば、空蟬の拒否が源氏の心を惹きつけたように、ここでは、夕顔との謎めいた出会いやその立ち居振る舞いが源氏を魅惑していくのである。繰り返して空蟬の内面を語っていく空蟬の物語と、それをほとんど語らない夕顔の物語は、対照的な方法意識に支えられながら、そのようにして描き出される女性の特異な存在が源氏を虜にしていくという点では共通性を有していると言えよう。

知られるように、二人の恋はなにがし院で夕顔が霊女に取り殺されたことによつて終焉を迎えるのだが、その後、右近によつて夕顔の素性が明かされることになる。どうしてあそこまで正体を隠したのかと質問する源氏に対して、右近は

L「なごてか深く隠しきこえたまふことははべらん。いつのほどにてかは、何ならぬ御名のりを聞こえたまはん。はじめよりあやしうおほえぬさまなりし御事なれば、現ともおほえすなんあるとのたまひて、御名隠しもさばかりにこそはと聞こえたまひながら、なほざりにこそ紛らはしたまふらめとなん、憂きことに思したりし」

(夕顔①一八四)

と答え、さらに素性を聞かれると

M「何か隔てきこえさせはべらん。みづから忍び過ぐしたまひしことを、亡き御後に口さがなくやほと思うたまふばかりになん。親たちははや亡せたまひにき。三位中将となん聞こえし。いと

らうたきものに思ひきこえたまへりしかど、わが身のほどの心もとなさを思すめりしに、命さへたへたまはずなりにし後、はかなきものたよりにて、頭中将なん、まだ少将にものしたまひし時見そめたてまつらせたまひて、三年ばかりは心ざしあるさまに通ひたまひしを、去年の秋ごろ、かの右の大殿よりいと恐ろしきことの聞こえ參で来しに、もの怖ぢをわりなくしたまひし御心に、せん方なく思し怖ぢて、西の京に御乳母住みはべる所になん這ひ隠れたまへりし。それもいと見苦しきに住みわびたまひて、山里に移ろひなんと思したりしを、今年よりは塞がりける方にはべりければ、違ふとて、あやしき所にもしたまひしを見あらはされたてまつりぬることと思し嘆くめりし。

世の人に似ずものづつみをしたまひて、人にも思ふ気色を見えんを恥づかしきものにしたまひて、つれなくのみもてなして御覽せられたてまつりたまふめりしか」 (夕顔①一八五)

とこれまでの経緯を明らかにするのである。

「らうたし」「らうたげなり」が多用されるように、夕顔は可憐な魅力を備えた女性であった。しかし、そのような振る舞いの背後に彼女なりの思慮や物思いが潜んでいたことが、ここで初めて明かされるのである。夕顔の父親が三位中将であったという事実は、順調にいけば夕顔にも「上の品」としての生活が待っていたことを意味している。しかし、父の死によりその後の人生が一変したのであった。おそらく、そのことが夕顔の振る舞いや性格にもながしかの影響を与えていたと読み取るべきところなのであろう。可憐に見え

た夕顔の心中にも、空蟬同様の苦悩や葛藤が潜んでいたということである。

それゆえ、右近の話を聞いた源氏が、夕顔の境遇に思いを馳せてその悲しみを理解するということがあつてもよかつたはずである。しかしここでも源氏は、

N「はかなびたるこそはらうたげれ。かしこく人になびかぬ、いと心づきなきわざなり。みづからはかばかしくすくよかならぬ心ならひに、女は、ただやほらかに、とりはづして人に欺かれぬべきがさすがにもものづつみし、見ん人の心には従はんむあはれにて、わが心のままにとり直して見んに、なつかしくおほゆべき」 (夕顔①一八八)

と夕顔の手柄を肯定的に捉えはするものの、

O思へどもなほあかざりし夕顔の露に後れし心地を、年月経れど思し忘れず、こもかしこも、うちとけぬかざりの、気色ばかり心深き方の御いどましさに、け近くうちとけたりし、あはれに似るものなう恋しう思ほえたまふ。いかで、ことごとしきおほえはなく、いとらうたげならむ人のつつましきことなからむ、見つけてしがなと懲りずまに思しわたれば……(末摘花①二六五)と回想されるように、夕顔の見せた可憐な振る舞いにこそ源氏の関心は向けられていくのである。言わば、ここでも源氏の理解は表面的なところに留まっているようなのである。

しかし、空蟬や夕顔の境遇への共感が浅いからといって源氏を責めることはできない。藤原道長が息子頼通の結婚にさいして「男は

妻がなり。いとやむごとなきあたりに参りぬべきなめり」(栄花物語・はつはな①四三五)と発言しているように、当時は妻方の財産や政治力を重視して女性を選ぶという結婚観が存在していた。それは、東屋巻での左近少将の造型に写し取られていたり、あるいは『うつほ物語』嵯峨の院巻で在原忠保の妻が娘を論ず発言に

今の世の男は、まづ、「人を得む」とては、ともかくも、「父母やありや。家所はありや。洗はひ・綻びはしつべしや。供の人に物は呉れ、牛・馬は飼ひてむや」と問ひ聞く。顔かたち清らならば、貴にらうらうじき人と言へど、荒れたる所に、かすかなる住まひなどして、さうざうしげなるを見ては、「あなむくつけ。わがいたつき・わづらひとやならむ」と思ひ惑ひて、あたりの土をだに踏まず。

(嵯峨の院一九四)

として紹介されているように、平安中期には一定程度の広がりを持った見方だったのだと推定される。反対に、「色好み」「すき者」と呼ばれる好色者たちは、そのような利害関係を度外視して女性と関わり合う人物たちであった。たとえば、右に見た忠保の娘は源仲頼と結婚していたが、貧しい宮内卿の娘を選んだ仲頼は、天下の貴顕からの婚取りにも興味を示さず、「世の中の色好み」(一九〇)「あやしく類なき好き者」(一九〇)とされた人物であったし、『落窪物語』においても、「君達は、はなやかに御妻方のさしあひて、もてかしづきたまふこそ今めかしけれ」(一九一)云々と言って右大臣の姫君との結婚を勧める乳母に対して、「古めかしき心なればにやあらむ、今めかしく好もしきこともほしからず、おほえもほし

からず、父母具したらむをともおほえず。落窪にもあれ、上り窪にもあれ、忘れじと思はむをば、いかかはせむ」(一九二)と反論する道頼も、かつては「いみじき色好み」(二二二)と噂された人物なのであった。

このことから推せば、親が既に死んでいる空蟬や夕顔に対して興味を失わない源氏のありようは、それはそれで一つの理想的な恋の英雄像ではあったのだろう。帚木三帖の段階では「すきがましきあだ人」「世のすき者」と紹介される頭中将たちとあまり変わらないように読み取れるが、物語はまずそのような形で、恋愛における源氏の非打算的な側面を描き出しているのだと思われる。

四

しかし、それだけのことであれば、光源氏も世の好色者たちと変わるころがない。確かに、好色者たちは利害関係に基づいた打算的な恋愛はしなかった。しかし、仲頼が経済的あるいは社会的には何の利益ももたらさない忠保の娘を妻としたのは、彼女が東宮からも入内要請されるほどの美貌の持ち主であったからだと思われるように、好色者たちも女性の容姿にはこだわりを見ることが多かった。ところが源氏の場合は、軒端萩と空蟬とをかいま見したさいにも、「をかしげなる人と見えたり」(帚木①一二〇)とされる軒端萩ではなく「言ひ立つればわろきによれる容貌」(帚木①一二一)の空蟬に関心を向けていくように、必ずしも女性の容姿を基準に恋愛相手を選んでいくわけではない。

そのあたりからも、光源氏が従来通りの恋の英雄としては造型されていなさそうなのが推察されるが、帚木三帖からの展開という点で言えば、それが明らかになるのが末摘花巻なのではないか。

前掲〇に示したように、夕顔のことが忘れられない源氏は、その代わりの女性を求めてさらなる女性遍歴を重ねていく。その結果、夕顔とはおよそ対照的な末摘花と関係を持つてしまうことになるのだが、注意されるのは、そこでもまた末摘花邸の窮乏が活写されている点である。源氏が末摘花の醜貌を目の当たりにするさいには、こっそりとかいまい見する源氏の目を通して

P 几帳など、いたくそこなはれたるものから、年経にける立廻変らず、おしやりなど乱れねば、心もとなくて、御達四五人ゐたり。御台、秘色やうの唐土のものなれど、人わろきに、何のくさはひもなくあはれげなる、まかでて人々食ふ。隅の間ばかりにぞ、いと寒げなる女ばら、白き衣のいひしらず煤けたるに、きたなげなる褶しぼりひき結ひつけたる腰つきかたくなしげなり。

さすがに櫛おしたれてさしたる額つき、内教坊、内侍所のほどに、かかる者どものあるはやとをかし。かけても、人のあたりに近うふるまふ者とも知りたまはざりけり。「あはれ、さも寒き年かな。寿いぢかければ、かかる世にも逢ふものなりけり」とて、うち泣くもあり。「故宮おはしましし世を、などてからしと思ひけむ。かく頼みなくとも過ぐるものなりけり」とて、飛び立ちぬべくふるふもあり。 (末摘花①二八九〜九〇)

と邸内の様子が記されるところからはじまって、翌朝の

Q 御車寄せたる中門の、いといたうゆがみよるほひて、夜目にこそ、しるきながらもよろづ隠ろへたること多かりけれ、いとあはれにさびしく荒れまどへるに、松の雪のみあたたかげに降りつめる、山里の心地してもあはれなるを：

(末摘花①二九五)

という叙述などが続くのである。傍線を付したように、源氏はこのとき初めてその惨状を直視しようなのだが、そのことを知った源氏は、Qに続いて次のように考える。

R：かの人々の言ひし葎の門は、かうやうなる所なりけむかし、げに心苦しくらうたげならん人をここにすゑて、うしろめたう恋しと思はばや、あるまじきもの思ひは、それに紛れなむかしと、思ふやうなる住み処にあはぬ御ありさまはとるべき方なしと思ひながら、我ならぬ人はまして見忍びてむや、わがかうて見馴れけるは、故親王のうしろめたしとたぐへおきたまひけむ魂たまのしるべなめり、とぞ思さるる。 (末摘花①二九五〜六)

ここでも雨夜の品定めを想起して「心苦しくらうたげならん人」をこのような所に住まわせてみたいと思うものの、「思ふやうなる住み処にあはぬ御ありさまはとるべき方なし」と、末摘花をその範囲外の存在と認識するのである。その容姿をはつきりと見てしまった以上、さすがに恋愛対象として末摘花とかかわり続けていくという展開はあり得ないのであろう。しかし、それで関係が断絶するのではなく、「我ならぬ人はまして見忍びてむや」と考えて、経済面での援助は継続していくようになる。図式的に言えば、零落した女性

と恋愛対象としての女性という二要素のうち、後者が脱落したことによって、帚木三帖では好色心の背景に退いていた何かが、ここに頭をもたげてくるのである。それが「まめやかなるさまに常におとづれたまふ」（末摘花①二九七）へと繋がつていくのだが、この点については、早くに松尾聰氏が

空蟬・夕顔の二女性は源氏がほれこんだからには、心理的にはすでに源氏と対等の地位に立っているのであって、いわば上流貴族の姫君とその点は何等変わりのないものになってしまっているのであるから、源氏は単に女人渉猟の範囲をひろげたにすぎなくて、源氏の人間の幅は、少なくとも直接的には、ひろがったわけではなかった。だが、この末摘花は、すでにいとわしいのみの存在である。そうした感情をしも敢えて押えて、思い捨てるのなら、捨てるにさしてわづらわしいことのない、落ちぶれた境遇の女性を、なお哀憐の情をもって「まめやかなる様に常におとづれ」たというのは、源氏の人間性の成長を示していることは明らかであろう。

と指摘したことが反芻されるべきであろう。本論では、「人間性の成長」というよりも、物語展開上の必要から空蟬や夕顔との関係において「世こそ定めなきものなれ」「玉の台も同じことなり」などと点描される程度だった栄枯盛衰についての源氏の敏感な感性がここにきて表面化してきたものと考えたいが、いずれにせよ、源氏の新たな一面が浮かび上がってきたことは間違いない。それがRでは「我ならぬ人はまして見忍びてむや」と表現されているのだ

が、それは「我はさりとも心長く見はててむ」（末摘花①二八七）と述べられている、源氏の心長さと通底するものである。

とすれば、ここで注意されてくるのは、帚木巻巻頭の叙述ではないか。頭中将たちが、前記したように、「すぎがましきあだ人」「世のすき者」と紹介されていたのに対し、源氏の場合は、「いといたく世を憚りまめだちたまひける」（帚木①五三）とされる一方で「さしもあだめき目慣れたるうちつけのすきずきしなどは好まからぬ御本性」（帚木①五三）を持つとも規定されていた。そのような光源氏の人物像を十全に把握することは難しいが、「まめ」でもなく「あだ」でもない——それは「あだ」でもあり「まめ」でもあるということにもなる——ありようを繋ぎ止めるものとして、この心長さがあるとは言えないか。別の言い方をすれば、これまで源氏を突き動かしていた「あだ」の要素（好色心）の背後から、「まめ」の要素が浮上してきた結果、それが心長さとして表面化しているのではないかということである。

そして、この点から看過し得ないのが、源氏による「幼き者は形蔽れず」（末摘花①二九六）という明示的な引用を中心に、雪の日の末摘花邸の窮乏を描き出すのに『白氏文集』「重賦」が使われていることである。「重賦」は『白氏文集』巻二に収められた秦中吟十首のうちの一首であり、諷諭詩に属する。重税に苦しむ民の窮乏を訴え、翻って暴利をむさぼる貪吏を戒めることを主題とするが、その詩がここに取り込まれているということ、とりわけ、その詩の一節がこの場面で源氏の口をついて出るということは、どう読み解

かれるべきものなのか。

知られるように、雨夜の品定めにおける式部丞の体験談に出てくる博士も「わが両つの途歌^きを聴け」（帚木①八五）と、同じく秦中吟の一つ「議婚」を口ずさんでいたのであった。これは結婚相手の女性を選ぶに当たって、富家の女と貧家の女とを比較して、前者は嫁ぐのは早いが夫を軽んじるのに対して、後者は嫁ぐのは遅いが姑によく孝行すると述べて、後者と結婚するように勧めるものである。財産の有無によって結婚対象が選ばれる現状を批判し、むしろ貧家の女こそ結婚相手には相応しいと述べるものであり、博士の人物像にもまた体験談の文脈にも適した引用となっているのだが、実はこれと同じようなことを源氏も口にしていた。雨夜の品定めが始まった直後、前掲Gに続く

S なまなまの上達部よりも、非参議の四位どもの、世のおほえ口惜しからず、もとの根ざしいやしからぬ、やすらかに身をもてなしふるまひたる、いとかはらかなりや。家の内に足らぬことなど、はた、なかめるままに、省かずまばゆきまでもてかしづけるむすめなどの、おとしめがたく生ひ出づるもあまたあるべし。宮仕に出で立ちて、思ひがけぬ幸ひとり出づる例ども多かりかし。

（帚木①五九〜六〇）

という発言に対して、「すべてにぎははしきによるべきななり」（帚木①六〇）と言っているのがそれである。

「なまなまの上達部」と「非参議の四位」を対比したこの発言は、必ずしも貧家と富家とを比べて後者と結婚するのがよいと言ったも

のではないが、「非参議の四位」の娘が宮仕えして思わぬ良縁を得るといふ話を、男の立場から捉え返して、それでは（結婚相手の女性を選ぶには）何事も財力豊富な方がいいのだね、とからかってみたのであろう。何気ない冗談ではあるが、発想としては「議婚」の主張と通底する。おそらく、この符合は偶然ではあるまい。夕顔の家に宿つたさい、翁びた声で仏前に額ずく声が近所から聞こえてくるのを、これも秦中吟の「不致仕」を踏まえて「朝の露にことならぬ世を、何をむさばる身の祈りにかと聞きたまふ」（夕顔①一五八）とあることや、先にも引いた「世こそ定めなきものなれ」「玉の台も同じことなり」といった発言と照らし合わせると、源氏の心中には、有為転変する時流の中で、目先の利益に目が曇らされてしまふ人間への醒めた意識と、そのような社会で図らずも弱者となつてしまつた人々への同情の念とが底流していたと推測されるからである。言い換えれば、『白氏文集』諷諭詩の思想に通じる発想が光源氏にも共有されているのであり、それが「すべてにぎははしきによるべきななり」というからかいになったと思われるのである。⁸⁾

とすれば、先の「幼き者は形蔽れず」という一節も、原詩の主題と無関係に口ずさまれたのではなく、重税に苦しむ民の窮乏に重なるものとして末摘花邸のそれを捉えたものと読み解くべきことになる。それは、あたかも諷諭詩の思想を体現するかの如くに、末摘花を救済する立場に源氏が立つということでもある。⁹⁾

導入としての雨夜の品定めは、このこと照応させるべきではないか。物語の展開という点からは、上中下の階層が固定的なものではなく

流動的であること、特に前掲GSによって「もとはやむごとなき筋なれど、世に経るたづき少なく、時世にうつろひておほえ衰へ」てしまった「なまなまの上達部」が存在することが、予め雨夜の品定めで提示されている点が重要であろう。そのことによって、空蟬や夕顔あるいは末摘花は、固定化された中の品や下の品の女性としてではなく、零落してしまつた女性として歴史の動態の中に浮かび上がってくることになる。その結果、彼女たちと光源氏との邂逅は、零落した女性と貴公子との単なる恋物語という枠組みに留まらないある種の主題性を帯びてくることになるのではないか。そこに『白氏文集』諷諭詩との接点も生じてくると考えるが、それは、零落した女性を厭わない帚木三帖の段階を経て、そのような女性を救済する末摘花巻へと至ることで、一つの頂点に達するのだと思われる。

五

しかしながら、言うまでもなく、以降の源氏が政治意識に目覚めて弱者救済に奔走するという展開にはならない。物語はこの後も源氏の女性関係を主要な話題としつつ語り進められていく。ならば、末摘花巻で登場した源氏の心長さは、その後どのように物語の展開とかかわっていくのだろうか。

本論で注目したいのは、Rで「心苦しくらうたげならん人」に言及されている点である。雨夜の品定めでの「さびしくあばれたらむ律の門に、思ひの外にらうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ限りなくめづらしくはおほえめ」（帚木①六〇）という左馬頭の発言に

由来するこの願望は、本来「らうたげならむ人」を求めるものであった。源氏自身も前掲Oでは「いかで、ことごとしきおほえはな
く、いとらうたげならむ人のつつましきことなからむ、見つけてし
がな」と思っていた。それゆえ、Rで「らうたげならむ人」に言及されるのは当然だが、どうしてそこに「心苦し」という要素が附加されるのであろうか。

「心苦し」は心に苦痛を感じることをいうものだが、その含み込む感情にはかなりの幅があるように見受けられる。そのため、細かな語感の特定は困難だが、Rの場合は雨夜の品定めを受けていることからしても、恋情に近いものではあるう。空蟬や夕顔にそれぞれ「消えまどへる気色心苦しくらうたげなれば」（帚木①九九）「ものうち言ひたるけはひあな心苦しと、たたいとらうたく見ゆ」（夕顔①一五七）という用例もあつたので、それが関係しているのかもしれない。しかし本論では、この段階での光源氏が「律の門」で暮らす女性への同情の念を獲得していたと想定されること、また「心苦し」に「他人の不幸や苦痛を思いやつて心が痛む場合」（小学館古語大辞典）があることを重視して、これを末摘花と同じような生活不如意の女性への憐憫の情が加わつたもの、あるいはそのような方向へと展開していく萌芽を含んだものと捉えたい（図式的に言えば、源氏の「あだ」の側面が求めたのが「らうたげならむ人」であつたとすれば、「まめ」の側面が求めるのが「心苦しき人」ということである）。

物語としては、その後源氏が「らうたげならむ人」を求める展開

は影を潜めるが、代わりに、関わり合った女性のなかから「心苦しき人」が救済の対象として浮上してくるようになるのではないか。

そのような女性の代表例が、花散里であろう。¹⁰⁾花散里巻で「御妹の三の君、内裏わたりにてはかなうほのめきたまひしなごりの、例の御心なれば、さすがに忘れもはてたまはず、わざともてなしたたまはぬに」(花散里②一五三)と登場してくるように、源氏の心長さゆえに繋ぎ留められている女性であり、須磨巻でも

T 荒れまさる軒のしのぶをながめつつしげくも露のかかる袖
かな

とあるを、げに葎よりほかの後見もなきさまにておはすらんと
思しやりて、長雨に築地所どころ崩れてなむと聞きたまへば、

京の家司のもとに仰せつかはして、近き国々の御庄の者など催
させて仕うまつるべきよしのたまはず。(須磨②一九六)

と、その窮状が訴えられるやすぐさま修理等の手配がなされているのである。

そして、この延長線上に

U 二条院の東なる宮、院の御処分なりしを、二なく改め造らせた
まふ。花散里などやうの心苦しき人々住ませむなど思しあてつ
つつくろはせたまふ。
(濡標②二八四〜五)

という二条東院構想が出現してくるのではないか。ここで源氏が想定しているのは、「花散里などやう」の人々だが、二条東院が完成したさいの

V 東の院造りたてて、花散里と聞こえし、移ろはしたまふ。西の

対、渡殿などかけて、政所、家司など、あるべきさまにしおかせたまふ。東の対は、明石の御方と思しおきてたり。北の対は

ことに広く造らせてたまひて、かりにてもあはれと思して、行末かけて契り頼めたまひし人々集ひ住むべきさまに、隔て隔てしつらはせたまへるしも、なつかしう見どころありてこまかなり。寝殿は塞げたまはず、時々渡りたまふ御住み所にして、さる方なる御しつらひどもしおかせたまへり。(松風②三九七)

や、初音巻で光源氏が二条東院を訪れたさいの「かやうにても、御蔭に隠れたる人々多かり」(初音③一五七)という記述に照らしても、彼女たちが源氏の心長さゆえに繋がることになった人々であることは疑い得ないであろう。物語が彼女たちと源氏との関係を直接語ることはないが、「心苦しき人々」はこのようにして、恋愛の対象というよりは保護の対象として二条東院に引き取られていくのである。その意味で、蓬生巻および閑屋巻で再登場する空蟬や末摘花がやがて二条東院に入っていくのは、極めて当然の結末なのであった。

以上のことから、本論では

① 雨夜の品定めは、「なまなまの上達部」の窮状を指摘し、その後続く空蟬や夕顔さらには末摘花と光源氏との関係を、零落した女性と貴公子との単純な恋物語に終わらせることなく、そこに『白氏文集』諷諭詩にも通じるような視点を導入するための仕掛けであり、

② その射程は、(紆余曲折を経ることにはなるが)二条東院構想

にまで及んでいたので、
と結論づけたと思う。

それ以外は新編日本古典文学全集によったが、表記など私に改めたところがある。

註1 今西祐一郎「物語と身分」(『源氏物語覚書』岩波書店一九九八年)

2 このような空蟬造型の問題については、増田繁夫「品定められる人、空蟬」(『講座源氏物語の世界』第一集、有斐閣一九八一年)、原田敦子「空蟬の夢」(『源氏物語作中人物論集』勉誠社一九九三年)など参照。

3 吉見健夫「空蟬物語の和歌—歌物語的方法と物語形成—」(『平安文学の風貌』武蔵野書院二〇〇三年)

4 この点については、拙稿「夕顔巻の物語と人物造型」(『日本古代恋愛文学史』笠間書院二〇一五年)でも触れたことがある。

5 この点については、藤原克己「源氏物語における〈愛〉と白氏文集」(『源氏物語と漢詩の世界』青簡舎二〇〇九年)、中西翔「色好み」の再検討」(『むらさき』二〇一〇年十二月)など参照。

6 松尾聰「未摘花の巻の一つの鑑賞」(『平安時代物語論考』笠間書院一九六八年)

7 今井源衛「光源氏」(『今井源衛著作集第2巻』笠間書院二〇〇四年)にも、壮年期についてはあるが「低次で素朴な「すき」「まめ」の段階から「心長」き博愛の持主に成長した光源氏」といった記述が見られる。8 夕顔巻に見られた「不致仕」の思想が光源氏の行動を背後で支えていることについては、拙稿「高麗人の相人の言葉について—光源氏論のために—」(『国語国文』二〇一六年十二月)でも触れたところがある。

9 村井利彦「楽府・諷諭詩・源氏物語」(『源氏物語逍遙』武蔵野書院二〇一四年)参照。

10 塚原明弘「二律の門」の「らうたげならむ人」—光源氏と花散里—」(『國學院雑誌』二〇一七年十月)参照。

*本文の引用は、『後拾遺和歌集』は新日本古典文学大系、『赤染衛門集』は新編国歌大観、『うつほ物語』は室城秀之『うつほ物語 全』(改定版)に、

(よしだ・みきお 本学教授)